

## 東京都心の社会変動 1960～1985

高橋勇悦\*

ただ今ご紹介いただきました、都市研究センターの高橋勇悦と申します。私は都市社会学をやっていますので、都市社会学の立場から「東京都心の社会変動」というテーマで、若干のお話をしてみたいと思います。

今日、皆さんご存じのように、東京都心は非常に大きな社会変動のなかにある、あるいは社会変動の中に入ろうとしていると思いますが、そういう中であって、さまざまな新しい問題にも直面していると申し上げていいのではないかと思います。中でも国際化あるいは情報化の進行に伴って、いわゆる世界都市としての性格を強めている。それに伴って、あるいはそれが要因になって、地価の暴騰が起っているあるいは大きなビルがどんどん建っているということがあるかと思います。あるいはまた将来計画などでも、東京都の「21世紀の東京像」というのが提起される、あるいはつい先日は、建築家あるいは学者グループなどが「東京海上計画の緊急提言」というようなことを発表したりしてしまして、これから一層大きな社会変動が起こるといようなことを印象づけているように思われます。しかしこうした社会変動の中で、今日の都市問題としての、いわゆるインナー・シティー問題といような状況も、また同時に進行しているのではないかと思います。これから私は、そういうインナー・シティー問題というものを念頭に置きながら、東京都心の社会変動ということを考えてみたいと思います。

私は、都市研究センターではコミュニティ部門を担当していますので、コミュニティの問題との関連で、特に生活問題とか、あるいは地域社会の文化・伝統、さらには地域社会の再生というところに私自身は関心があります。

私がこれからお話いたしますことは、1960年から1985年までのデータ、特に人口、人口動態、世帯という三つの指標に関するデータに基づいて、時系列的に、特に23区、あるいはその中の地域の社会変動がどういう経過をたどってきたのかということについてです。

それをごく簡単に、ポイントだけ申し上げていきたいと思いますが、まず増加傾向にある指標を見てまいりますと、大体四つの点にわたって、その傾向の特色を指摘することができるのではないかと思います。

第1番目は、昼間人口の密度が増大する、あるいは昼夜間人口比が増大するということです。これはよく知られていることですが、言うまでもなく昼夜間の較差がどんどん拡大していく、つまり、都心地域の機能がどんどん大きくなっていくことの反映かと思われませんが、そういう昼夜間の較差が拡大する。つまりは都心の昼間の高密度化がどんどん進んでいく。都心部とそれ以外の地区との間の差が広がっていくということが一つ指摘できるかと思います。

第2番目には、「老年人口比」、「世代世帯比」——世代世帯という妙な言葉を使いましたが、世代世帯と私がここで勝手に名前をつけたのは、老人のいる世帯という意味です——

---

\* 東京都立大学都市研究センター教授

が、増加傾向にある。この老年人口比に関連の深いのは当然のことですが、世代世帯比で、同じように、これも全体として比率を高めてきております。特に都心、それから東部の内周の区の比率が増大しています（一番外側を外周と呼び、その内側を内周という言い方をしていますが、その場合の内周というのは、台東区・文京区・荒川区・墨田区という地区になります）。地区全体の高齢化がどんどん進行している中で、特に都心あるいは東部の内周の比率が増大しているのです。

ここでちょっと補足して申し上げますと、老年人口比というのは、1960年代あるいは70年に入るころまでには、比率からいうと、どちらかといえば西の方にその比重が傾いていました。それがどんどん東の方に移行する。東部の方の比重が高くなっていく。いうなれば西から東への移行というのが一応指摘できるのではないかと思います。

第3番目には、「一人世帯比」（一人だけの世帯）、あるいは「小世帯比」（4人以下の世帯）の指標は、全般としては比率がどんどん増大していますが、特に千代田区を中心として左側の西部、西側の地区、特にその中でも渋谷・中野・新宿・豊島という地区での比率が高まっているということです。逆にいうと、東側の増加は少ないということです。これもまた西の方に傾いているといえます。

「普通世帯比」の場合も、同じような傾向を示します。ここにいう「普通世帯比」というのは、面積に対する比率です。ここだけ面積に対する比率をとっていますが、普通世帯比は、西部の内周、なかんずく豊島・中野・新宿・目黒・渋谷という内周地区が高まってきているということが指摘できるかと思います。

もう一つそれと同じように指摘できることは、外国人の比率です。外国人の比率は、従来はむしろ東部の方の比率が高かったわけです。今でも東部の方の比率、とりわけ台東・荒川の比率が高いわけですが、しかしながら最近どんどんふえているのは、西側、西部の方です。西部の豊島・中野・新宿・目黒・渋谷あたりの比率がどんどん高くなっています。外国人の比率を見ても、東から西へという比率の変化が認められると言っているのではないかと思います。

第4番目に、「有配偶率」あるいは「離別比」などを見ますと、次のようなことが言えるだろうと思います。有配偶率は、最初は外周、一番外側が高くて、中心に向かうほど低くなる、いわば同心円的な構造をなしているという傾向がありました。そういう傾向は今でも残っていますが、後には東の方が高くなって西の方が低くなるという変化を見せています。とりわけ豊島・新宿・中野などの比率が相対的に低くなる傾向が見られます。それは男性の場合も女性の場合も大体同じですけれども、男の方の変化の方が激しい。実はここで図表をお見せすればすぐおわかりいただけるのですが、男性の有配偶率の1985年の状況と、女性の1960年の状況と非常によく似ています。というのは、男性の場合の変化が、ようやく女性の1960年代の状況に近づいたということにもなるわけで、それは後で申します性比の変化（男性の方が多かったのがどんどん女性もふえてきて、100に近くなるような性比の変化）と非常に深い関係があると思います。いずれにしてもそういうふうにはいわば同心円的な構造から東高西低という傾向に変化してきているということが言えます。

「離別比」の方を見ますと、これは男と女の場合とで非常に違います。男の場合は、東部の内周、台東・荒川あたりの比率が高くなっている。それに対して女性の場合は、どういふわけか西部の内周の地域、豊島・中野・新宿・目黒・渋谷という西部の内周の地域で

比率が高くなってきている。そういう傾向が読み取れると思います。

以上のように増加傾向にある指標を見てみますと、4点ほど指摘することができるだろうと思います。それは、それぞれの指標において大体地区と地区との間の較差が広がってきている、程度の差はありますが、差が開いてくるという傾向があることを示しているわけです。

さてつぎに、減少の傾向を示す指標はどういうものがあるかと申しますと、人口密度から準世帯比に至るまでいくつかございます。これもポイントを指摘するにとどめたいと思いますが、第1は「人口密度」、「人口移動率」、「人口滞留率」を一まとめにして考えられるのではないかと思います。

夜間の人口密度の場合は、都心の周辺、内周のあたりが高密度を維持しています。密度全体として低下しつつありますけれども、都心の周辺の区が大体高密度を維持している。ただし、ここで注目したいことは、その密度が、やはり東よりも西の方にどんどん傾いてきていることです。典型的なのは、台東区の密度がどんどん低下して、豊島区の密度がどんどん上がるという形で、東から西への、いわば密度の中心の移行というものが認められるということです。人口移動率につきましては、ここでいう人口移動率というのは、転出・転入人口をまとめて、この総人口に対する比率を意味するものですが、その人口移動率は西部、西側の移動率が高く、東部の方が低い。「人口滞留率」というのは、転入に対する転出の割合ですが、これもやはり西部が高い比率を示しているという傾向があります。ここでは要するに、西部の方にそういう変化の中心があるといえましょうか、そういう傾向が認められるということになります。

それから第2に、「核家族比」を見てみますと、これはいわば外側の区、外周が高率化している傾向がありますが、しかしながらその中で、やはり西部の方が低く東部が高率になってきている傾向があります。ここでも東側と西側のコントラストみたいなものが出てくるということです。

第3番目に、「年少人口」とか「性比」とか、あるいは「人口再生率」というものを見てみますと、大体において都心の比率が低下してきています。14歳以下の年少人口を見ますと、外側に行けば行くほど比率が高くなり、都心が少なくなっています。これは、高齢人口がふえているのと同ちょうどコントラストをなしていると言えるかと思えます。

「性比」の場合も外周、外側が増加して、都心部はどんどん低下しています。若い人が周辺に移るということに伴って、そういう現象が起こったのではないかと思われれます。私たちの世代というのは、都市は若い人が集まる所であって、しかも性比が高い、男が圧倒的に多いというイメージを抱いておられて、実際に、かつて1960年代、70年代ごろまではそういう傾向があったわけですが、しかしながら今日ではそれがすっかり変わって、都心のその比重はどんどん低下してきている。つまり女性の比率が高まってきて、男性の比率がどんどん低くなってきています。

「人口再生率」も、外周の比率が高くなってきています。

第4番目に、「平均世帯人員」は、西部の方は少なく東部の方が多いという傾向が出ています。

もう一つ「準世帯比」というのは、都心を中心として集中する傾向がありました。今でもそういう傾向はありますが、これはどんどん相対的に比率を狭めてきていると言えるかと思えます。

以上、増大する指標の場合と減少する指標の場合と二つに大きく分けて、その変化を見てまいりましたけれども、要するに、都心が、特に昼間の場合はその密度を非常に高めてきている、そしてその地域が広がってきている、また、何と言っても都心及びその周辺の高齢化が著しく進んでいる、同時に青少年人口の減少がどんどん進んで、性比も非常に小さくなってきている、あるいは周辺と比べれば逆転している、さらに、東と西のコントラストと言いましょか、そういう傾向がいろんな形であらわれてきている、そういう変化が認められると言えるかと思えます。

最後に、1960年及び1985年の変化を、70年、75年及び80年のデータも入れて、類型化してみるとどうなるか申し上げてみたいと思います。21の指標の変化を、クラスター分析で一応類型化してみましたら、変化というのは、大きく6つぐらいに分けてみることができる、つまり同じような変化をたどった地区を6つぐらいに分けてみることができるとい結果になりました。たった21の、しかも人口世帯、人口動態の限られた指標だけではありますが、その指標について見ただけでも、一応その変化の類型を導き出すことができるように思います。

グループ1は千代田区と中央区、グループ2は、港区・文京区・台東区・墨田区・荒川区、これは都心と言いましょか、千代田・中央の周辺の地区です。それからグループ3というのは、大田区・板橋区・北区で、北と南に分かれていて同じような傾向を示すということになります。グループ4は、品川・目黒・世田谷・杉並という地域です。外周の郊外地域がその中に含まれるということになります。グループ5は、新宿区・渋谷区・中野区・豊島区で、いずれも副都心などを含んでいる地域ということになりましょか、先ほどから西部を中心として変化しているということをおししてきましたけれども、そこにしばしば登場してきたのはこの4区です。グループ6は、江東区・練馬区・足立区・葛飾区・江戸川区の6区で、練馬区だけ西部に入ります。

このように6つに分けてみた場合に、先ほど申し上げましたインナー・シティー問題を念頭に言えば、もちろん第1のグループと第2のグループ、つまり千代田区・中央区の地域と、その周辺の台東・墨田・荒川、それから港・文京という地区が、最初に当然のことながら、注目せざるを得ないということになるかと思えます。繰り返して申しますけれども、この地域は、人口が減っている、人口の構成がどんどん変化している地域です。第1のグループと第2のグループの決定的な違いは、第1グループの千代田・中央の場合には昼間人口が増大していますが、第2グループの場合には、昼間人口の密度も減っているという点にあるわけで、同じくインナー・シティー問題を考える場合でも、そういうところから基本的な性格はかなり変わってくることにならうかと思えます。

私は、大都市の中心部の特にコミュニティ形成の問題に関心をもっているものですから、そういう問題にアプローチするために、そういうインナー・シティー問題がありそうな地域はどういうところであり、歴史的にどういふふうに変化してきてそういう地域になったのであるかということから、今のような仕事を若干手がけてきているわけで、まだ人口だけの程度にとどまっていますが、もちろんこれから産業の衰退の問題とかあるいは社会問題とかそういうところまで、さまざまな指標を通してその変化を見るという作業をつづけてゆく必要があるだろうと思っています。その作業が一段落すればインナーシティー問題を念頭に置いた地域の性格というものを、より一層明確にとらえることができるのではないかと考えています。

差し当たり今日は、人口あるいは世帯、人口動態の非常に限られた指標だけを中心にして、時系列的な23区、あるいは都心の変化の話をしてみました。非常につたないお話ですが、そろそろ時間もまいりましたので、ここで終わりいたします。

どうもありがとうございました。

〔付記〕この講演は、その後本誌第31号に掲載した拙稿「東京23区の変動分析（1960—1985）—その1／人口・人口動態・世帯」のデータや図表の一部を用いて行なったものです。それで、講演の原稿は、要旨をそこねない程度に手を入れて、短くしました。できましたら、その論文を参照して頂ければ幸いです。